

シンポジウム 高山植物の保護と盗掘防止を考える

自然保護委員会 伊藤 徹



パネルディスカッションの8名、左端は小泉、小野両会員



1998 年 (平成 10 年)

12 月号 (No.643)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目 次

シンポジウム・高山植物の保護と盗掘防止を考える……………	1
カナダ山岳会年次総会に出席……………	4
追悼・畏友 中島寛のこと……………	5
報告	
資料委・山岳博物館等連絡会議	6
学生部・皇居一周マラソン大会	6
総務委・新入会員の集い……………	6
海外の山・35年目のクロスピーク	7
支部だより	
福岡支部・ナムナニ峰登頂……………	8
宮崎支部・宮崎ウエストン祭……………	9
さんけんだより……………	9
わが支部とっておきの一山	
秋田支部・丁岳……………	10
関西支部・ロックガーデン……………	10
静岡支部・黒法師岳……………	11
東西南北	
島の山巡りーその2……………	12
短歌・山に咲く花……………	13
W・ボナッティとの再会……………	13
武田久吉メモリアルホール開館	14
懺悔したかった田口二郎さん……………	14
半世紀前の新聞論調……………	15
図書紹介……………	16
ネパール国際山岳博物館募金……………	16
新入会員・図書受入報告……………	17
会務報告……………	18
ルーム日誌・INFORMATION……………	19

▶日本山岳会事務取扱時間

月・火・木……………	10~20時
水・金曜日……………	13~20時
第2、第4土曜日……………	閉室
第1、第3、第5土曜日……………	10~18時
▶図書室開室時間	
ルーム開室日(月曜日を除く)……………	13~20時
▶ルーム年末年始休み……………	12月29日 ~1月5日

平成十年九月二十三日、東京御茶ノ水の全電通ホールで、シンポジウム「絶滅から救おう高山植物! 保護と盗掘防止を考える」が開催された。これは、日本山岳会自然保護委員会と北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会との共催、環境庁・林野庁・文化庁ほか十七団体の後援により、(財)自然保護助成基金の協賛を得て行われたものである。

シンポジウムは十時開催、各地からの現状報告、パネルディスカッション、講演など、盛り沢山の内容をとどこおりなくこなし、午後四時過ぎに閉会した。参加者は四百三十名を数え、盛会であった。

■斎藤会長・堂本議員から挨拶

開会にあたり、斎藤惇生日本山岳会会長は次のように挨拶した。

「花泥棒という言葉がある。風流の

ちょっととした出来心は許されるかもしれないが、高山植物に関しては許されるものではない。また登山者のモラルの向上も大事なことだ。高山植物保護の問題は今日一日のシンポジウムで片付くとは思わない。これからも自然保護、高山植物保護の問題に取り組んでいくことが大切だ」

続いて堂本暁子参議院議員(国際自然保護連合副会長)は、

「高山植物の絶滅は開発の故とばかり思っていたが、その半分以上は盗掘によることを知って、自分の子供が虐待されているような思いがした。私は国会の中で、コマクサやヤツモリソウの代弁をしようというと思っています。今日お集まりの皆さん方は、ものいわぬ高山植物の代弁者であると心強く感じているし、私はこのシンポジウムを日本山岳会が主催したことを会員の一人として誇り

に思う。今日ここで話されたことが、北海道から沖縄まで、大きなうねりとなって広がっていくことを願っている」と話された。

■基調講演「高山植物の現状と保護」

——北海道高山植物盗掘防止ネットワーク代表・小野有五(北大教授・JAC自然保護委員)

夕張岳で起きた高山植物の大量盗掘をきっかけに、今年の三月に全道規模のフォーラム「お花畑をめぐって」が開催された。全国各地の高山植物盗掘の現状からして、この問題は北海道の中だけで議論してもことは済まされないということから、今回の全国レベルでの開催となった。

高山植物盗掘防止には多くの問題点がある。これに対し、我々はこれまで何もしてこなかったことも事実だ。本日は、各地で盗掘に悩まされている方々、国として高山植物保護に関わっておられる行政関係者、高山植物の栽培に関わっておられる方々など、それぞれの立場からこの問題を見つめ、率直な意見交換を行って、盗掘防止に向けて少しでも前進をしたいと願っている。

■各地からの現状報告

五地域から高山植物の現状について、スライドを交えて報告があった。

一、「南アルプス・北岳における高山植物保護の現状」塩沢久仙(南アルプス倶楽部代表)

「北岳キタダケソウ生育地保護区」の管理業務を芦安村から委嘱され、取り組んでいる。山梨県は昭和六十一年に「高山植物保護に関する条例」を制定している。

二、「白馬岳」植生の荒廃と復元

——土田勝義(信州大学農学部教授)
白馬岳は大量の登山者による踏みつけやこれに伴うエロージョンにより、植生の荒廃が甚だしい。白馬村が実施した環境庁の補助事業「特殊植物保全事業」の植生復元の仕事を担当した。

三、「早池峰山」ようやく緒についた保護政策——近村晴男(早池峰の里元気倶楽部事務局長)

早池峰山と薬師岳の鞍部を通る小田越の道路が四十六年に開通してから、山は急速に荒れ出した。高山植物の踏みつけ、盗掘も後を絶たない。当会ではマイカー規制を関係機関に陳情、今夏やっと実現した。

四、「アポイ岳を守るか」——田中正人(アポイ岳ファンクラブ)

最近、二年続きでヒダカソウの大量盗掘事件があったが、これは氷山の一角にすぎない。昨年、日高支庁や道有林、様似町などが集まって「アポイ岳保全対策協議会」が開かれた。

登山道のロープ張りや監視カメラの設置などに取り組んでいる。

五、「夕張岳からの報告」——本城昭一(ユウバリコザクラの会代表)

夕張岳の高山植物群落は、一九九六年に国の天然記念物に指定されたが、昨年の大量盗掘事件をはじめ、高山植物の盗掘は後を絶たない。我々の働きによって、夕張岳関係者協議会も設置された。

■講演「高山植物の特性と保護について」——大場達之(千葉県中央博物館・客員研究員)

「高山植物は単に美しいから、貴重だから保護するというのではない。ある地域において最も貴重なものは、そこに古くから定着している本来の自然だ。世界中のすべてのところが、そこにしかない固有の風土、自然を持っている。つまり、貴重なものだけが大切なのではなく、地球上のすべてが大切なのだ。地域の多様性を守ることが地球の多様性を守ることにつながる。保護する植物の対象には、個体、種類、群落、群落集団、生態的の系列あるいは高山帯の植生全体など、いろいろなレベルがある。ともすると高山植物の保護は貴重な種を守るものとされるが、高山植物は固有の地形・地質、周囲の生物と関係を持って存在している状態に価

がある。この関連性が失われたならば、植物はただ生きているだけの存在にすぎず、本来の種の持つ情報は失われてしまう。移植して保護するということは、最後の手段で、最初からとらえるべきものではない。レッドデータブックなどは貴重な種だけをピックアップしているが、その地域の植物を全体として保護するとなると、それでは十分ではない。外来種のシロツメクサのように本来そこにはない植物は除去されねばならない。保護すべきもの、除去すべきもの、全植物を評価して、適切な保護を加えることが本来のあり方だ。わが国の高山植物保護の法制は極めて不十分だ。ヨーロッパの主要な国では、たとえばラン科植物は、一切、採取・栽培・販売が禁止されている。数百種が国の法律で保護されている。日本ではデパートや園芸店で平気で売られている。欲しい人には増やして分けてやればよいという論があるが、これは泥棒に追い銭をやるようなものだ。自然を破壊してまでも栽培するのか、ということだ。貴重種は日本中どこでも例外なく、採取・販売できないようにしなければならぬ。そうすれば、公然と行われている採取・栽培・販売はかなり押さえられよう。皆さん方のやっておられる高山植物の保護運動は大

切だが、最も強力な武器である法制の確立なくしては、まだまだ苦しい戦いを強いられるだろう」

■パネル・ディスカッション「高山植物と盗掘防止について」

小野有五氏をコーディネーターに次のメンバーにより一時間四十分に行わされた。

パネリスト
白旗史朗(日本高山植物保護協会副会長)、水尾君尾(ユウバリコザクラの会事務局長)、池田啓(文化庁・文化財保護部記念物課)、植田明浩(環境庁・自然保護局野生生物課)、所芳博(林野庁・業務部業務第二課)、籠橋隆明(弁護士)コメント

小泉武栄(東京学芸大学教授)フロアーからの発言者

三橋俊治(東京山草会)、中田公彦(前山梨県景観自然保護課長)、木内三四郎(浅間山高山植物保護対策協議会)、平野紀子(尾瀬長蔵小屋)小泉氏はパネリストの発言に引き続いて、スライドを使いながら、次のようにコメントされた。

「高山植物の盗掘防止のためには法的規制、パトロールの強化とともに自然の重要性をもっとアピールする必要がある。高山植物は法隆寺と同じくらい大事なものが、なぜ大事

なのか、ということが一般にはわかっていない。これは自然についての知識が不十分なためだ。植物と生育地の環境とのつながりも理解されていない。自然史教育が学校教育から欠如したままになっている」

この後、議論は盗掘防止を中心に進められた。「法的規制・現地での取り締まり」及び「栽培・増殖」の二つの問題について、意見交換のあらましをお知らせする。

法的規制は有効か
高山植物の採取を規制する法令には、自然公園法・自然環境保全法・種の保存法(以上環境庁)、文化財保護法(文化庁)、森林法(林野庁)があり、これについては前記の三庁のパネリストから説明があり、また法的規制とともに、現地のパトロール、巡視などもやっていることが話された。

この問題に対して出された主な意見は、「天然記念物に指定されても、大量に盗掘されている。行政は何もやっていない」「現実には法律の網がかかっているが、罰金を払えばよいというような業者もいるという。罰則が甘いのでは」

告発の問題については「告発は可能だが、その後の警察の対応は、鈍い」「警察はなかなか告発を受理しない」「山梨県では条例があるおか

げで、警察との連絡はスムーズに行っている」

籠橋氏は「行政がやってくれないというのではなく、法律をどうやって活用するかという視点が大切だ。法律は動くもの、市民サイドの強い働きかけが望ましい。悪質な業者に対しては厳しい態度が必要。警察は現地調査が苦手で、なかなか山に行ってくれないということもあるが、むしろ山を愛する人、市民サイドに権限を与えることを考えてよい」

現場が手薄ということについては、「法律は一応、整備されている。問題は取り締まる人が少ないのでは」「国立公園のレンジャーの数があま

りにも少ない。また異動が激しい」という意見が出された。

栽培・販売の是非

「高山植物が欲しい人には、栽培して売ればよい。そうすれば盗掘が減る」また「山採りのほうが高く売れる」という論がある。

三橋氏は次のように説明された。「アツモリソウが何万円という話があったが、これは盗掘を誘発しかねない。アツモリソウは一株三千元が相場だ。アメリカではアツモリソウを組織栽培で増殖している。山採りのほうが増殖品より高いというのは、一般論としては誤りだ。キタダケソウの保護が効果を上げているという

スズメ、セミ、クラゲ、ヒガンバナ……。一緒に遊んでもらった動植物へのオマージュ。

串田孫一・文／辻まこと・画

わたしの博物誌

稀代のモラリストと登山家でもあった自由人の二人が、失われゆく自然への深い思いを込めて作り出した伝説的画文集。時を超えていまオリジナル原寸で初の刊行。¥8500(税別)

日本アルプス

宮下啓三 日本の山をアルプスという意味は？ウェストンから三島由紀夫まで、その歴史と魅力を分析した山岳文化史。¥2500(税別)

みすず書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21
tel. 3814-0131 fax. 3818-6435

が、これはキタダケソウの実生増殖がうまくいっているということもあると思う。

法律の力のみで盗掘が防げるとは思っていない。やはり安価な生産品を大量に流通させることが効果的と信じている。種の保存法ではレブンアツモリソウのような特定種の所持や栽培を禁止していない。むしろ大量に生産することを奨励している。

山草会はアツモリソウなどの栽培技術を確立している。アツモリソウの自生地での保全が事業として行われているが、我々の技術は生かされていない」

これに対して「種類によって栽培に難易があり、困難なものは山採りされるということがある。山草愛好家と植物学者との意思疎通が必要」という意見も出された。

ついで中田氏は「山梨県は昭和六十一年に『高山植物保護に関する条例』を制定している。条例が自然公園法や森林法と異なる点は、盗掘したものの譲渡禁止など流通を規制していることだ。また業者の登録制も指定している。条例は、種の保存法と同じく届け出があれば、栽培・販売ができるようになっていく。キタダケソウが増えてきたのもこの効果とされている。さらに平成八年に、より積極的に保護増殖に取り組むこ

とにした。アツモリソウなど三種を指定して、自生地での増殖、試験研究機関での実生培養などを行っている。条例で一番効果があったのは流通に規制を加えたこととされている。山梨県は高山植物保護についての県民の関心が高い。環境教育の充実も重要なことだ」

木内氏からは浅間山のアツモリソウ自生地の保護活動について、苦心談の披露があり、ついで平野氏から「尾瀬は盗掘よりオーバーユースによる踏みつけが問題。木道を高くしたことは有効。今年の至仏岳の入山規制は疑問」などの意見が出された。

最後に小野氏から「今日は踏みつけによる高山植物の損傷の問題にまでは入れなかったが、このほかにも尿処理の問題などがある。要するに、国立公園にもなっている日本の山岳地域はきちっと管理されていない。これは環境庁の責任でもある。

われわれ国民の大部分は、環境庁、林野庁、文化庁を支持しているのだから、自己規制をしないで、管理のための予算の獲得に頑張る欲しい。市民グループのボランティア活動には限度がある。行政の強い後押しをお願いしたい」と要望があった。

ついで会員の川越尚子さんにより、以下のアピール文が読み上げられ、シンポジウムの幕を閉じた。

アピール文の要旨

「氷河時代を生き延びてきた高山植物は文化遺産にも劣らない地球の財産だ。私たちはこれを護り、永く後世に伝えていかねばならない。

登山者や一般の皆さん

◆山を愛するあなた 私たちはあなた方の良識ある行動に期待する

◆盗掘を繰り返すあなた 私たちはあなたがたの行為を決して許さない。行政に携わる皆さん

◆環境庁や文化庁、林野庁は地方自治体と連携して早急に対策を講じて欲しい。

◆司法当局は違法行為に対して厳罰をもって望んで欲しい。流通の規制など、新たな法的対応を望む。

人々が自然を大切にするとは、常識だ、という社会を作っていくこと。シンポジウム参加者一同

カナダ山岳会年次総会 及び晩餐会に出席

熊崎和宏

本会では、西暦二〇〇〇年にカナディアンロッキーズ・アルバータ峰初登頂七十五周年を祝う記念の行事をカナダ山岳会と合同で行うことが正式に決まっている。本年十月三十一日に、カナダのシャトール・レイク・



カナダ山岳会総会でスピーチする斎藤会長

ルイーズにおいて開催されたカナダ山岳会年次総会及び晩餐会に、斎藤惇生会長、熊崎和宏常務理事、熊崎皆子海外連絡委員会委員が招待され出席してきた。

昼の総会の席で斎藤会長は「この記念すべきイベントをただ成功させるだけではなく、恒久的に両国の登山界が友好関係を持ち、これを維持していくよう努力したい。そのことが、先人の遺した偉業を受け継いだわれわれの責務であると思う」という主旨の挨拶をし、カナダ全国の各地域支部から集まった役員の方々から喝采を浴びた。

また二百六十名の出席者を迎えた晩餐会で、斎藤会長は鮮やかなダンスステップを披露。非常にフレンドリーな中で友好を温めあった。

追悼

人生六十年、駆け抜けた男
―畏友 中島 寛のこと―

石 弘光

中島は、人生六十年、全力疾走して駆け抜け、あっという間に逝ってしまった。彼ほど昔の仲間に強烈な印象を与えた者はいない。一九五七年四月、中島も私も国立の桜が満開の頃、あこがれの一橋大学の門をくぐった。入学式もそこに、雑木

林の片隅にある山岳部の部屋に集まったのが、十数名の山好きな新人部員であった。新入生歓迎登山、五月連休の山行、谷川合宿と続き、待望の夏山合宿が始まった。肩に食い込む十二貫もある荷物をボツカし、やっとたどり着いた剣沢での定着合宿は、来る日も来る日も雨だった。そのようなつらい日に、いつも元気で仲間を激励し、嫌な仕事も率先してやってくれたのが中島だった。並外

れた体力、そして大食漢の彼は、まさに山男として山岳部に根を下ろし、部員としても着々と成長していった。四年生の時、サブ・リーダーに。春山、冬山合宿では、いつも先頭に立ち、またアタック隊員であった。三年生の冬山で、大天井岳から槍を、長駆一日で往復したことなどは、彼だからこそできた登攀であろう。彼は、ただ馬力に任せて先頭に立って皆を引っ張るというだけではなかった。パテて落後しそうな仲間を、絶えず気を配り、時には人一倍重い荷を担いでいるのに、さらに他人の荷物も持つてやるという男だった。

卒業を控え、一九六一年一橋が初めて企画したペルー・アンデス遠征隊に参加、輝かしい足跡を残して帰ってきた。その後、日本山岳会のエベレスト登山に加わり、未踏の南壁を八〇〇メートルの地点まで登攀したという中島ならではの仕事をやってくれた。

中島が、昭子夫人と結ばれたのも山があつてのことだった。一九六七年五月、当時の山岳部の二年部員だった中村慎一郎君が、五月の連休に鹿島槍天狗尾根を下降中、滑落・即死という痛ましい事故が起こってしまった。救援に真っ先に駆けつけ、遺体の収容に当たったのが中島であ

った。中島の献身的な活動により、中村君のご両親はどれだけ慰められたことであろう。昭子さんは、中村君の姉上であり、中島君に憎からぬ思いを、また中島も同じような気持ちを抱いたことは想像に難くない。お似合いの夫婦が誕生したわけである。今回の厳しい闘病生活に耐えられたのも、昭子さんあつてのことであつた。

元気者の中島は、時折大病を患ってきた。これまではすぐに元気になる、また山へという繰り返してあつた。しかし今回ばかりは、そう簡単にはいかなかった。今年の五月いつものように、中島と私が山小屋を持つ、大町エコノミスト村で会った。私は昔の山仲間と立山・針の木ヘスキーに。中島は単独で有明山へ登りに出かけた。この日は、五月三日、彼は肺がんで余命いくばくもないと医者から宣言された三日後のことであつたとのことだ。おそらく、この最後の山行を心の支えに、闘病生活に入るつもりだったのだろう。それにしても、十時間以上かけ一人で登ってきた体力、気力は、半年ぐらいいしか生きられないとされた病人のものではなかった。

その後、がんセンターへ入院、抗がん剤を投与しても、事態ははかばかしく改善されなかった。八月のお

盆の頃、中島夫妻と私も二人で、大町で岩魚料理を食べに行ったのが、彼との最後の楽しい思い出になってしまった。彼ほど、淡々と自分の不治の病を他人に説明した奴はいない。五月の頃、十一月に生まれる初孫が見られるだろうか、担当の医師に尋ねたが、決してイエスと言ってくれなかったと、語ってくれた。入院中も本を持ち込み、これまでの山行記録を執筆するという忙しい毎日を最後まで過ごしていた。そして、いつも昭子夫人が傍らに寄り添っていた。多忙の一言に尽きる彼の人生の終りに訪れた、夫婦ふたりの安らぎの一時であつたように思う。

コンパスグラス HB-3

広視野10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのまま正しい磁気方位です。

重量78g.

つや消し黒 ￥17,000 透明 ￥600

実色メタリック ￥18,000 消色別

カタログ代無料、電話、FAX、来書でどうぞ

〒177 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号

TEL 03-3928-5411 FAX 03-3928-5411

株式会社 石神井計器製作所

報告

REPORT
12月

資料委員会

全国山岳博物館等連絡会議開催

十月三十一日、第二回連絡会議をルームにて開催、全国より八博物館の代表の方々、主催者を代表して小倉副会長、以下資料委員会の十名が出席。四時間に及ぶ熱心な討論、山岳会のホームページの紹介など今後日本山岳会を含め各博物館の横の連携を深めながら、資料の有効活用を進めること、当面は資料委員会主導で来年十一月ルームで第三回連絡会議開催を決定。懇親の後無事終了した。

(鯨坂青)

出席の山岳博物館

秩父宮記念スポーツ博物館 伯耆国山岳美術館 田淵行男記念館 アルプス山岳館 植村直己冒険館 東京都写真美術館 富山県立山博物館 河口湖美術館

学生部

皇居一周マラソン大会

十一月八日、多数の大学が参加して、例年通り皇居一周マラソン大会が行われた。団体戦は今年も明治大学が優勝、五連覇と敵なしの様相だが、千葉工大、法政大も意地を見せ、一・二区では早稲田の浜谷君も頑張り、好レースが展開された。

団体男子(四人・各一周)

一位 明治A 一時間十八分三十二秒
二位 千葉工大A

三位 法政A

四位 東京農大A

五位 上智、一橋、法政混成

団体女子

優勝 東洋、専修、学習院選抜
個人・男子(三周)

一位 飯塚敏宏(東京農大四年)
二位 浜谷栄彦(早稲田大五年)

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

三位 早川広行(中央大二年)
個人・女子

一位 鈴木ちとせ(東京農大一年)

二位 唐沢若葉(東洋大一年)

三位 内野麻衣子(学習院大二年)

ブータン遠征隊無事帰国

十一月七日、ブータンより元気に帰国した一行が十一月二十六日十九時より報告会を行った。ブータンヒマラヤ西ルナナ地方、カラカチュラの五七二七メートル峰にアタックしたが、頂上直下の三〇〇メートルに及ぶ岩壁に阻まれ、登頂は逃した。スライドを上映しながらの報告は、若々しい感性が随所に見られ、実り多かった海外山行を思わせた。

(宮崎紘一)

総務委員会

一九九八年度上期
第二十七回新入会員の集い

十一月七日、恒例の新入会員オリエンテーションが本会ルームで開催された。対象は会員番号一二七二六より一二八八六までの百六十一名で、うち三十四名が参加した。

絹川常務理事の開会の辞では始まり、斎藤会長が「日本山岳会の基本精神は、パイオニアワークとアドベンチャーにあり、それは中高年にも言える」と、故今西錦司元会長およ



98年上期の新入会員たち

び脇坂順一会員(本年八十五歳で海外二百山登頂)を例に歓迎の言葉を述べた。続いて中川常任評議員が、本会の組織と活動についてビデオ放映を交えて説明。特に「日本山岳会の財産は人である。楽しく活動するには待ちの姿勢でなく、積極的に何か役に立てないかの気持ちで参加して欲しい」と述べた。

講演は、江本嘉伸海外連絡委員より「ヒマラヤ最新事情IIトレッキングからエベレスト登山まで」のタイトルで、今日のヒマラヤが抱える政治的背景、エベレスト登頂千人の意欲、そして公募登山の現実について、ジャーナリストとして広い視野から、また中高年登山について、自己の体

海外の山

35年目の
クロスピーク

江本嘉伸

で、いくつか六千メートル峰に登頂している妻の美渚子とふたりだけで、もう一度クロスピークに挑戦しよう、と思い立った。

いまだ未踏峰のままのこの山は、その後外国隊には開放されていない。カトマンズの代理店を通じてネパール政府に申請し、現地で許可を取得できる、との感触を得て九八年九月二日、日本を出発した。

観光省との会見で許可はグンサのチェックポストに送る、との言葉を聞いた時にはホッとしたりしい。筆者あてにこの時点で「許可が出るものと確信し、山に向かいます」との葉書が美渚子から届いている。

一九六三年といえば、東京オリンピックの前の年で、まだ今のようにな一般人には海外渡航が許可されなかった頃のことである。日本は当時外貨を十分持っていなかったため、一九六四年四月一日まで、公務、ビジネス、学術などの名目がなければ、パスポートを取得できなかった。

「第二次東京農大芸術調査隊」と銘打った宮澤憲隊長以下六人から成る登山隊がその六三年三月、カンチェンジュンガの南のトウインズ（七三三〇メートル）に向かった。

七〇〇メートルには達したが、トウインズは登れなかった。残った数日をつかって隊長の宮澤はシェルパとともに隣のクロスピーク（タブレシカルとも。六五一〇メートル）に挑戦し、途中までルートを開いた。

十月一日、五六二〇メートルのC2へ。一九六三年当時のハーケンを見つけた。十月七日、六一〇〇メートルにC3建設。狭い岩稜にやっと張ったテントで恐怖の一夜を過ごす。就寝前、酸素を吸った。

十月一日、五六二〇メートルのC2へ。一九六三年当時のハーケンを見つけた。十月七日、六一〇〇メートルにC3建設。狭い岩稜にやっと張ったテントで恐怖の一夜を過ごす。就寝前、酸素を吸った。

十月八日、アタック。先行するシェルパが張ったロープをユマールリング登攀するが、一〇メートル登ると息が苦しくなる。やがてチムニー状の水壁にぶつかる。

「ふくらはぎがつってしまふのが恐くて」アイゼンの爪で立てず、壁を背にチムニー登りをやったので、「ママ、それじゃあ登れないよ」とシェルパに言われてしまう。六十五歳の美渚子を彼らは「ママ、ママ」と呼んだ。

疲労した美渚子は何度もスリッパし、その都度サードが背中をさすり、励まし、行動食を口にいられてくれた。

一九九八年十月八日午後十二時五十分、登頂。しかし、過酷な下山が待っていた。時にはサードが美渚子のバンドを支え「まるで猿回し」の状態で降りた。

無事キャンプに戻ったとき、初めて「感極まってヒマラヤの雪を溶かすほど泣く」。

妻の大奮闘を宮澤は「よくやった、と今も思います」と語る。宮澤自身七十歳を越える身で五〇〇メートルの高地に一カ月以上滞在したことで疲労困憊に近い状態だったのだ。

下山後、期待していた許可証はおいていない、とわかった。ネパールでは公式には登頂を公表できない、という。ふたりにとっては、「ヒマラヤの真珠」ともいうべき貴重な体験だった。

験を通じた興味深い話があった。

その後、新入会員は二グループに分かれて自己紹介、質疑応答を行った。多く出された話は、入会動機は時間的余裕ができたので山登りを再開したい、また出席新入会員の平均年齢が高く安心した、などであった。懇親会は、岩手支部久多良謙一新入会員差し入れのワインを手に、小倉副会長の乾杯の音頭ではじまった。役員を含め約六十名の会場は肩を寄せ合う盛況で、和やかな雰囲気の中大いに語り合い、閉会となった。聞けば会場を移しての二次会では、同期会の幹事役まで決まっていたらしい。

(高原三平)

ビジットU.S.A 北米の大自然を訪ねる(7人で催行)

グランド・キャニオンと レッドロック
を歩く8日間

●出発日:2月19日(金)・3月12日(金)・4月23日(金)

●東京(成田)発着 **318,000円**



運輸大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員

アルパグループサービス株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911

大阪 ☎06(444)3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

福岡支部

ナムナニ峰登頂と辺境の旅

ナムナニ峰(七六九四メートル)は西チベットの最高峰である。われわれ四人の弱小登山隊は諸条件に恵まれ、BC建設後二週間で新ルートからの登頂を果たすことができた。この登山は福岡支部四十周年記念行事の一環でもある。

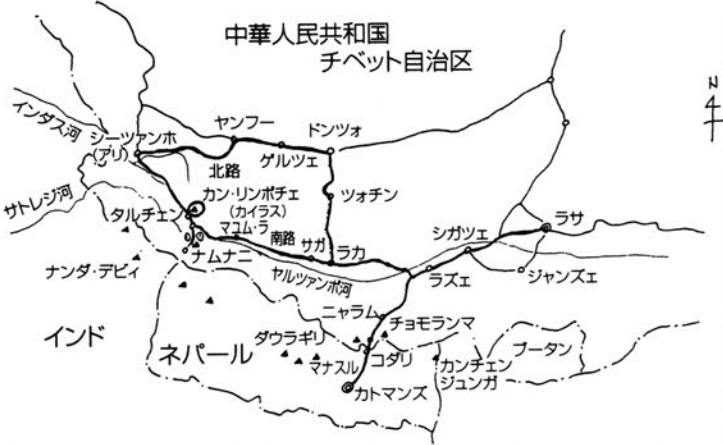
五月六日、福岡から関空経由カトマンズへ。コダリを経て陸路でチベットへ入った。チベット高原の標高は四五〇〇メートルを下らない。ニヤラム、ニヤラムタンゲで五日間かけて高所順応を図る。

チベット南路はサガまでは何とか道らしいが、その先はわずかに轍があるだけの難路である。計画ではサ

ンムーから六日でB Hに着く予定でいたが、ナフコー河でのトラックの渡河失敗、砂漠や河床の沼地など悪路による車のトラブルでB Hへ着いたのは十二日目であった。

五月二十一日、標高四七〇〇メートルにB Hを設営。二十三日には北西尾根の末端を越え、瓦礫の溪谷を登って標高五六〇〇メートルのザロシマロバ氷河末端にBCを建設。二十三日、北西稜のガレと氷河の間を登り下部アイスフォールの上部左端にC1を建設。

二十九日、八〇メートルの氷壁か



ら右のナギナタフォールの上を登り、セラックのゴルを越えて右の氷河に出る。クレバスを避けて左のセラック帯に沿って登ると雪田に出る。標高六八〇〇メートルのセラックの中にC2を建設。三十一日、上部のセラック帯の右を抜けて上部大氷田の標高七三〇〇メートルにC3を建設、アタック態勢に入る。

六月六日、太田、パサン、デンドウの三人で七時三十分C3を出発。四〇度を超す急峻な氷田の末端部を登り、一〇〇メートルの上部西山稜北側岩壁帯のもろい岩にロープを固定し、雪煙が舞い上がる西山稜上に出る。ひとつのピークを越える

と目の前に頂上が現れ、十三時十五分山頂に立った。

北方にはマバム・ユムツォ、ランガク・ツォ、カン・リンポチエ、目を返せば西ネパールヒマラヤ、ガルワールヒマラヤの山々が手に取るように眺められた。写真を撮り終えて感激の中を一気に下る。シェルパに各キャンプの撤収を依頼し、この日のうちにBCまでの標高差二〇〇メートルを下った。第二次隊を予定していたが、体調思わしくなく断念する。

下山後、タルチェンで年に一度の大きなお祭りサガダガがあると

日干し煉瓦の建物が数十戸並ぶ小さな村だが、お祭りを前に数百のテントが張られ、各地から訪れた巡礼者で賑わっていた。

カン・リンポチエの周囲は二五キロあり、われわれは二日で巡ることにした。左回りでラチューに出るとちょうど祭りの最中で、長さ三〇メートルほどのダルボチエという柱を中心に一万人近い群集であふれていた。ラマ僧は笛、太鼓、鐘を鳴らしながらお経を唱えている。

巡礼は西側堆積岩の大峡谷を抜け、ラチューから北の標高五六三六メートルのドルマ・ラを越える。あいにく天候は悪く猛烈な吹雪となる。巡礼者は雪にまみれ、読経しながら登ってくる。チョルテンのある大きなマニ石の前で体を投げ出して礼拝を繰り返す。来世の幸せを祈ってのことであるが、彼らの宗教心はわれわれには到底理解できない。

峠を越え、荒涼としたラムチューの河畔に一泊、カン・リンポチエの東側をめぐってタルチェンに戻った。さらに西の要塞アリを経由しチベット北路をたどった。道々チベットのロバ、黄羊、クチグロナキウサギなどの野生動物や咲き始めた高山植物が観察された。ドンツォから南路のラカに出る。シガツェを経由して六月十八日ラサに着いた。事務処理を



祖母山頂の宮崎支部メンバー

宮崎支部

第十回宮崎ウエストン祭

■二十八人の合唱に絶賛と感動

宮崎ウエストン祭前夜祭への参加もあって、宮崎支部十一月の定例山行は県北高千穂町の赤川浦岳（一二三メートル）登山。JAC資料委員の田畑真一氏・中華人民共和国上海出身の芝天さん夫妻のゲスト参加もあって錦秋のスカイライン・プロムナードとなった。

前夜祭は、祖母嶽神社宮司による神事・関係者の玉串奉奠に続き神楽・

終え、二十二日カトマンズへ戻る。
(浦一美)

子ども神楽が奉納された後、巨大な櫓にキャンプファイアーの火が点火され、山間の会場は荘厳さを増幅させた。この篝火に照らし出された舞台で五ヶ所小学校（校長矢野信男・全校生徒二十八人）の合唱がはじまる。テンポよく「輪になって踊ろう」「歌はばくらの友だち」の二曲を披露してくれた。

■異色のゲスト二人に大拍手

十一月三日、三秀台で近代登山の父ウエストン師の顕彰碑前において開催された第十回宮崎ウエストン祭は、小学生の点鐘・献花・黙禱を捧げた後、高千穂町長・同議会代表・宮崎支部長の挨拶、小学生のエーデルワイスの歌合唱に続き、田畑真一氏の「ウエストンと子どもたち」のミニ講和、芝天さんによる中国語のエーデルワイスの歌などが披露され、式典に花を添えた。

また、前夜祭と式典に参加してくれた五ヶ所小学校の児童に、宮崎支部からささやかな学用品をプレゼントし交流を深めた。

好天に恵まれた祖母山登山は、式典を終えた会員三十八人が最後尾を勤め、快調に晩秋の裸木の中を千間平・三県境・国観峠を経由して、十三時四十五分祖母山（一七五六メートル）山頂に立った。山頂では、神武天皇の祖母・豊玉姫の石祠に拝礼。

阿蘇・九重連山の雄姿は霞に埋没して眺望できなかったが、大崩山塊・親父山・黒岳や、前日登山の赤川浦岳・筒ヶ岳などを指呼の間に堪能することができた。

十四時、山頂を出発。急勾配の風穴コースをたどり、ヤマグルマ、シヤクナゲの濃緑の葉とブナ、ミズナ

さんけんだより 新米管理人奮闘記・6 来年までさようなら

木村太郎・弥生

いよいよ山研を閉じる時期がやってきた。雪解けを見たのがついこの間と思っていたら、今は穂高の峰もうつすらと新雪に覆われている。十月二十五日の閉所には、山浦信濃支部長はじめ支部の皆さんもみえ、山研委員と一緒に冬ごもりの作業を手伝ってくれた。飲料水として沢の水を引いているパイプ五〇メートルの水抜き、室内の大掃除などをしていけると、大晦日のような気分になり、開所からの日々が思い出されてくる。

群発地震などもあったが、もっとも印象に残ったのは季節ごとの

ラなどの裸木とのコントラストに感嘆の声を上げ、また中国大陸と同一樹木のタンナサワフタギなど遺存植物に思いを馳せながら十六時、北谷登山口に下山。ウエストン師のレブリカに別れを告げて宮崎への夜道を急いだ。山よりがとう……。

(井野元繁)

美しさと、動植物の愛らしさだ。上高地で暮らしていると、この動植物はもちろん、枯れ葉までがいておしく感じられるから不思議だ。この半年間で本当に多くのことを感じ、学んだように思う。

また、上高地では月に二回、地元の旅館、各施設の人が参加してゴミを拾う一斉清掃がある。一見清潔で美しい上高地だが、ゴミ拾いをしてみると、その多さにビックリする。また、梓川にすむ野生のマガモに餌を与えている観光客をよく見かけるが、その行為が生態系のルールを壊すことになることも上高地で知った。

大好きな上高地。いい動植物といつまでも「いい関係」でいられるよう、この地でさらに学んでいきたいと思う。

来年も、山研で皆さんとお会いできることを期待して……。

秋田支部

丁岳 ひのとだけ

幽谷の断崖と原生林の広がる

秋田と山形県境のほぼ中央部に、標高一〇〇メートル前後の山々を連ねる丁岳地があり、その主峰が一等三角点のある丁岳である。

激しい浸蝕によって、多くの奇岩重畳の断崖を生み、山全域が急峻で、山麓からはどっしりとした重量感に満ちたドーム型の山姿で望まれる。また、植生的にも貴重な山で、ブナを主体とする天然林や亜高山性植物などが豊富で、県の自然環境保全地域に指定されている。

山麓には笹子、直根、百宅などの典型的な呼称の集落を抱き、かつての丁行者の名残や黒菊という幻の花が咲くといわれる伝説などもあり、みちのくのロマンを秘めている山でもある。登山道は秋田県側のみ、急峻な北側の稜線に開かれており、山頂の一角からは、鳥海山の雄姿や新庄方面が雄大に眺望される。



当欄についてご意見、ご感想、またおもしろいアイデアなどがありましたら、お寄せください。
総務部

1	コースタイム	登山口－20分－滝見台－30分－平坦地（ブナ林）－30分－観音岩－40分－丁岳頂上－100分－萱森－20分－庄屋森－40分－観音森－90分－登山口
2	記録	
3	地図	国土地理院（25,000／1地形図） 丁岳（50,000／1地形図）鳥海山
4	交通	由利高原鉄道鳥海山麓線・矢島駅より羽後交通バス上野宅（カミノヤケ）行き・上野宅（終点）下車。登山口まで徒歩1時間40分（上野宅から大平野営場を経て水無林道を5kmほどたどる）。マイカー利用が便利。
5	付近の観光地	宿泊所（上野宅）平兵湯（古くからの湯治場） 丁荘 へいべいのゆ りのつたい 法体ノ滝（日本百名滝）高さ57m 院内銀山跡（日本有数の銀山）と岩井洞遺跡（縄文人） 羽後交通矢島営業所 TEL：0184-55-2148 鳥海町役場商工観光課 TEL：0184-57-2201
6	その他	
7	参考図書	『秋田県の山』（山と溪谷社刊） 『秋田の山歩き』（無名社刊）
8	問い合わせ	眞坂洋一（会員番号7875） 佐々木民秀（会員番号5748）

関西支部

RCCのゲレンデ ロックガーデン・ トレイル

ロックガーデンの名で古くから関西の岳人に親しまれてきた芦屋の岩場。その岩群へのアプローチの道をつないで、一つの楽しいコースがとれます。地獄谷―風吹岩―奥高座瀧―荒地山―弁天岩と、岩の園を周遊する文字通りのロックガーデン・トレイル。

一帯は明朗な風化花崗岩の地形で、その中を縫って行く道は、大阪湾や阪神間を眼下に眺望もよく、岩登り、沢歩きの楽しさも随所にあって、六甲のエッセンスといえるコースです。場所柄アプローチは至便、バリエーションは多様で、途中から下山もできれば、逆に他のコースにつないでさらに、ということもできます。

先年の地震でだいぶ荒れましたが、今は落ち着いて危険もほとんどなくなり、むしろすさまじい崩落崖や転落巨岩など、千年に一度の見ものでもありましょう。

1	コースタイム	阪急芦屋駅-25分-高座瀧-5分-地獄谷-80分-風吹岩-20分-奥高座瀧-30分-荒地山-30分-ナマズ岩-5分-弁天フカ切り岩-45分-阪急芦屋川駅
2	記 録	
3	地 図	国土地理院 (25,000/1 地形図) 西宮 宝塚 昭文社 山と高原地図 No.51 六甲 摩耶 有馬 調査執筆・赤松滋(関西支部 8281)
4	交 通	阪急電鉄神戸線芦屋駅より徒歩 新幹線からはJR在来線に乗り換え芦屋駅下車、タクシーで高座瀧まで入るのがベター。
5	付近の観光地	神戸、灘、西宮、宝塚など。有馬温泉には、入浴のみでも可の施設もある。
6	そ の 他	起点の高座瀧には、RCCの創始者藤木九三氏のレリーフがあり、毎年秋の始め関西支部と大阪・兵庫の山岳連盟共催で、藤木祭が行われている。 荒地山の周辺は近年ボルダリングのゲレンデとしてもにぎわっている。
7	参 考 図 書	水野祥太郎著『岩登り術』(ロッククライミングクラブ刊)ほか多数。
8	問い合わせ先	久保三朗(会員番号4079) 大津陸郎(会員番号11111)

静岡支部 一等三角点の名峰 黒法師岳

南アルプスの光岳以南は深南部と呼ばれる。池口岳から鶏冠山の長野県と静岡県との県境から静岡県側の南に派生した磐田郡水窪町と榛原郡本川根町の町境尾根上に、三角形の山容をした立派な山が黒法師岳で、深南部の主峰である。

黒法師岳はシラベに覆われ、昔は黒帽子嶽といわれていた。頂上には石屋の間違えて彫ったといわれる×字形の珍しい一等三角点標石が埋設されている。昭和四十五年に、静岡支部の水野公雄会員が世間に公表して、現在の三角点ブームになっている。

平成十五年静岡国体が水窪町で行われるために、最近では黒法師岳周辺の登山コースが著しく変化している。麻布山・前黒法師山・黒法師岳・前黒法師岳・寸又峡温泉のコースは、昔ながらのテントと水を担いでの山行ができる。黒法師岳と前黒法師岳の間がルートファインディングの技術必要。

1	コースタイム	野鳥の森広場麻布山登山口-60分-奥宮-20分-麻布山-60分-前黒法師山-120分-バラ谷ノ頭-70分-黒法師岳-60分-二ツ山-150分-前黒法師岳-150分-寸又峡温泉
2	記 録	
3	地 図	国土地理院 (25,000/1 地形図) 門桁 水窪湖 寸又峡温泉
4	交 通	JR飯田線水窪駅よりタクシー(水窪タクシー・電話 0539-87-0118 JR水窪駅・電話 0539-87-0241) 大井川鉄道サービスセンター(電話・0547-45-4112)
5	付近の観光地	水窪町役場産業課(電話・0539-82-0008) 観光協会 水窪町役場(電話・0539-82-1117) 水窪営林署(電話・0539-82-0370) 本川根町観光協会(電話・0547-59-2746)
6	そ の 他	宿泊案内 山王峡温泉「しらかば荘」電話・0539-87-0938 水窪町 民宿「もちづき」電話・0539-87-0693 寸又峡温泉入浴「翠紅苑」電話・0547-59-3100
7	参 考 図 書	『静岡県の山』(山と溪谷社刊) 『日本三百名山』(新ハイキング社刊)
8	問い合わせ先	廣澤和嘉(会員番号11159)

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどし投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚でお願いします)



イラスト 野田四郎

島の山巡り—その2—

中村太郎

一九九八年六月六日、玄界灘の島大島の一等三角点、本点、点名大島山地名なし、標高九四・六メートルに登った。同じ日に、島の最高峰、御岳、標高二二四メートルにも登る。

■海の正倉院に登る

六月七日に、沖ノ島の一等三角点、本点、点名沖ノ島、山地名一ノ岳、標高二四三・六メートルに登る。一ノ岳に登ることは大変なことなのだ。

沖ノ島は、島全体が宗像神社の境内であり、奥の院になっている。一般人が渡島可能なのは年一回、五月二十七日だけである。五月二十七日は、明治三十八年(一九〇五年)のこの日に、帝国海軍がロシアのバルチック艦隊に大勝利した日である。

海戦に先立って、連合艦隊司令長官東郷平八郎元帥は、沖ノ島の神に戦勝を祈願したと伝えられている。

沖ノ島の神は、天照大神の御子神田心姫(タゴリヒメ)・湍津姫(タギツヒメ)・市杵島姫(イチキシマヒメ)の三女神が、天照大神の降臨の前に、日本の玄関口にあたる宗像の地に降り立ったといわれている。

この女神は、嫉妬深く女性の渡島を許さない。島に向かう船の船長は、もちろん男性でなければならない。女性は、大島にある遥拝所中津宮から、遠く沖ノ島の沖津宮に向かって拜むことになる。

指定日以外の日に渡島するには、所定の手続きを取って宗像神社から許可をもらわなければならない。幸い、許可が得られても、その日に海が時化て船が出なければ、それで済みである。チャーターできる漁

船も決められているようであった。

このような面倒な手続きは、すべて吉村健児さんが済ませてくださった。

ところで沖ノ島は、海の正倉院といわれている。この島から大量の遺物が出たからである。漂着物研究家、石井忠氏によれば、一九五七年には、地面に積もった木の葉を取り除くと、ガラス玉、鉄片類が露出していた。

コバルト色をしたガラス小玉が木漏れ日に照らされて、神秘的に輝く美しさに感激したそうである。少し掘ると、続々と玉類が出てきて、鉄器も刀剣や鉄鍬などの武器が次から次と出土する。畳半枚ほどの広さから「内行花文鏡」「広格矩鏡」などが十面も出土し、これからいくつ出てくるか見当がつかない。また、滑石製の白玉、中玉が二千個以上見つかって、調査をしていた一同呆然となったそうである。上陸するところの注意書に「御神水以外の一木、一草たりとも持ち帰ること禁止」とあった。吉村さん、真顔で曰く「ここ掘れワンワンで、今でも宝物が出てくるよ」

沖ノ島は、福岡県大島村にある。この原始林は一九二六年(大正十五年)十月に天然記念物に指定されている。クスノキ科の常緑高木タブノキ、亜熱帯植物のオオタニワタリやビロウの北限地である。

さて、沖ノ島・一ノ岳登山グループは、吉村健児、井上優、三上忠人の北九州勢に、古市進、牧野忠男、柳下棟生、川善市、小生の東京勢の都合八名。波は高かったが船は出港した。一時間と少しで沖ノ島に到着。船が接岸すると、一人だけ常駐している神主さんが出迎えに出てきた。われわれが、定められたとおりの儀式をするかどうか検分にこられたようにも見えた。

上陸するには、まず御前海岸の海に全裸になって飛び込み、禊をしなければならない。海水は意外に冷たく、心臓麻痺を起こさないかと心配する。さて、それから島におわします女神様に向かって、このとおりの男性ですとお見せする。海から改めて上陸、山から流れ落ちる御神水で心身を清めて秘儀は終了する。

石の階段ではじまる参道を、沖津宮・社殿のある海拔九〇メートルまで登る。いっしょに登ってくれた神主さんから全員お祓いを受け、このお宮の縁起を拝聴する。一人二千元なりのお布施を人数分奉納する。

社殿の上部には巨大な岩石が覆い被さり、左側には太い御神木の杉が聳えている。社殿の裏には、古代の祭祀跡が二十三方所あるが、いずれも社殿の周囲に集中しているという。夜になると、オオミズナギドリが囀

に帰ってきて奇妙な声で鳴き続け、淋しさがいや増すそうだ。

一ノ岳頂上には無人灯台があった。



イラスト・小寺佳美

短歌

山に咲く花

逸見征勝

木道になべてよりそふチングルマ霧に吹かれて花冠ふるはす

雪解白雪の底より流れきて原のおほかたヒナザクラ咲く

瘠せ尾根に咲きつらなれる姫小百合霧ふかければ天上の花

残雪より滴る水の寄るところ紫に染む白山小桜

源流はせせらぎ低しリンドウの咲ける山原みなもととして

一等三角点、三六〇度の展望である。が見渡す限りの視界は大海原のみ。お目当ての一等三角点は一・五メートルほどの石柱の上に、削られたのか、まるで蠟燭のように立っていた。どうしてこうなったのか、大いに不思議であった。

山から下りてくると、岸壁に神主さんが待っていて、タイやウマズラハギの超大物を大きなクーラー一杯くださる。その日の夕餉は、吉村邸で、魚屋の息子だった川さんが腕によりをかけて作った刺し身、煮物に舌鼓を打った。

■要塞の島の一点

六月八日は、門司の沖に浮かぶ島、白島しらじまの一等三角点の山に登りに行く。点名「白島」一等三角点補点、山地名「男島」一二八・一メートル。一行は、九州勢が吉村健児、日向祥剛、山本守の三名、東京勢は牧野さんが帰京して四名、総勢七名であった。

この島には、島に隣接して埋め立てたところに作った、日本でも最大級の石油備蓄基地がある。だから、上陸するには事前に、氏名、性別、生年月日、住所、職業を書面で申請し、許可を受けておく必要がある。

朽ちかけた古い神社のあたりが登山口ではないかと見当をつける。木の根、岩角ではなく、草につかまっ

ルの山とはいえ、猛烈な急登である。三十分も悪戦苦闘して直登すると、石垣にぶつかった。何のことはない、石垣の上には草は茂っているものの車の通れそうな道があった。いわゆる軍隊道路だったのであろう。地図を読むとその道は頂上には行かない。

また、見当をつけて頂上を目指して登る。一番高いと思われるあたりをいくら探しても三角点は見つからなかった。そのころは、ブルドーザーはなかったとしても、ブルで引っ掻き回したような巨大な穴だらけであった。おそらく太平洋戦争の時、この島そのものが軍の要塞だったのであらう、というのがわれわれの結論であった。

島巡りの山に登っていると秘境も多く、得難い体験をすることがある。(沖ノ島については、富田弘平さんの書かれたものを参考にする)。

W・ボナッティとの四十年ぶりの再会

芳賀孝郎

チヨゴリザ初登頂を終えた一九五八年八月十二日午前十時ころ、ハイポーターに声をかけられて、ヒドンピークのほうのモレーンを見ると外国隊の四人が、われわれのBCに向

かってくるのが見えた。

軽い足取りで、スチールポールを持って氷河を登ってくる。少し小雪が降っていたが、双眼鏡でよく見ると彼らの服装が鮮やかである。グレイのチロールハットにグレイのニッカ一ボッカ、臍脂のセーターに臍脂のストッキング、ショートスパッツに光った靴、セーターの胸にはイタリアの国旗がついていた。

さっそく桑原隊長にイタリア隊の来訪を伝えると隊長から隊員へ、全員服装を整えるようにとの命令が出された。しかしわれわれには、イタリア隊のスタイルに相当する衣服はなく、紺のダウンジャケットを着るのみであった。

イタリア隊が着くと全員で出迎え、お互いにガッシャーブルムIVとチヨゴリザの登頂成功を祝した。日本に留学経験のあるF・マライーニは、流暢な日本語で、日本のお茶とお菓子を所望するときは、貴重な羊羹は、三ミリ以上に切ってはならないことになっていたが、この時は特別に十ミリに切られ、お茶とともにマライーニ、ボナッティ、ドクターともうひとりの隊員に差し上げた。ハンサムなボナッティは、いつも笑顔で控え目なしぐさが印象的であった。ガッシャーブルムIVの初登頂とアルプスの数々の初登攀を行った力は、彼

のどこに潜んでいるのかと思うようであった。私は、光った目と静かな姿に強い魅力を感じた。

ボナッティは、ヘルマン・ブルー夫人から、日本隊がブルーの遺品を見つけたかどうか聞いて欲しいと依頼されていた。われわれが見つけたブルーの遺品は、桑原隊長からボナッティの手に渡された。彼は感慨深くお礼を述べていた。

会談の後、私はイタリア隊に歌をお願いした。四人が二部合唱で「大尉の遺言」と「フニクラフニクラ」をバルトロ氷河の山々にこだまして歌ってくれた。われわれのお返し之歌は、寮歌とデカンショとお粗末なものであった。ボナッティは帰り際、モンブランの麓クールマイユールに住んでいるのでモンブランに登りに来るように、と言ってモレーンを下っていった。

イタリア隊が帰った後、桑原隊長は隊員を集めて、これからの遠征隊は国際的なスタイルを用意すべきとの忠告をした。なお、遠征隊は二部合唱で歌えるレベルにして欲しいとの要望があって、われわれは苦い顔をして聞いたことが思い出される。

私はこの十月一日、イタリア文化会館で四十年ぶりにボナッティに会った。年をとったが相変わらずハンサムなので、ボナッティであること

がすぐにわかった。四十年前、チョグリザのBCで撮った写真を五枚プリントして差し上げた。写真を見ながらお互いに四十年前の若さを称えあい、再会を喜びあった。

彼はボデスタ夫人とともに、日本で多くのことを経験し、新しいことを見つけて大いに喜んでいて。私はいつの日かイタリアに行ったときにはボナッティ宅を訪れ、再び山に対する心境を聞きたいと思っている。

武田久吉メモリアルホール 尾瀬に開館の運びに

土橋進一

来春（一九九九年五月）、福島県南会津郡松枝岐村が建設中の、ミニ尾瀬公園管理棟二階に、本会創立発起人の一人である武田久吉博士のメモリアルホールが、地元尾瀬のシーズン開幕に先立って開館することになった。武田氏直筆の原稿、諸著書、色紙、尾瀬資料、カメラなどの遺品、関連美術品ほか数百点が既に「武田文庫」として収蔵されているが、その所蔵品に加えて、当会が町の山岳博物館に寄託していた同氏の登山用具、山岳地図などとともに、ご遺族の武田澄子氏、林静枝氏よりご提供いただいた故博士所蔵の全資料

（博物学同志会、霧の旅会などのものを含む）も、逐次展示、公開される運びとなっている。

今後、横浜の開港資料館（主として父君アーネスト・サトウのもので、一部に博士関連のもの）とともに、武田博士研究の重要な拠点になるものと思われる。

*文中一部「丹沢 山物語」秦野市発行、野村みつる氏著より引用）

悔しかった田口二郎さん

栗林一路

おそらく私は、亡くなった田口二郎さんの最後の見舞い客の一人であったろう。というのは、今年六月の半ばに鎌倉・長谷のお宅に伺ったからである。その時の「印象記」を南極観測隊の村山雅美さんが読まれて、その概略を「山」に報告しては、というお勧めを受けた。

そもそもは、田口さんから私に「山岳信仰の話が聞きたい」という長距離電話が入ったので伺ったのだが、

「最近、目が悪くなって本を読むのがおっくうなんです。人に話してもらおうほうが手取り早いから」と、まず言い訳をされた。こういうわがままを通すのだからご立派。その対象になった人は何人ものいるのではな

いか。

氏は一九一三年、東京生まれ、グロースシュレックホルン北東壁初登や戦後のマナスルに活躍、JACの副会長を勤めたこともある。しかしそのことよりも私は、『東西登山史考』の著者ということで、親愛感を持っていたのでお付き合いが始まった。エルナ夫人ともども。

広い芝生の庭に面した応接間に通されると、田口さんは長椅子に横になって眠っておられた。夫人が「オトモダチガキマシタヨ」と声をかけたが返事はない。私が挨拶すると氏は目をつむったまま自分の肩の脇のスペースを叩いて、「ここに座りなさい」という仕草をされた。

田口さんは私に握手を求め、その手を放さずに反対側の手で、私が誰であるかを確かめるように、私の二の腕を上下に滑らせてではじめて寝ている人からそんなことをされるのは初めてなので、ちょっと困ったが、半病人にはなすがままにさせておこう」と覚悟してその姿勢をくずさずにいた。

今まで峻嶒な山の岩をさんざんつかんできたであろう田口さんの腕は、浅黒く筋張っていて、老人斑がたくさん浮き出ており、私もやがてこういう腕になるのであらうかとふと思った。「往年の勇者かくのごとし」



鎌倉の自宅できつろぐ田口夫妻

の感慨がふとよぎった。

ややあってこの世の人に戻った氏は、シャンと椅子に座りなおして、それから二時間あまり、肝心の山岳信仰の問答に移ったが、それは省略しよう。長談義の末に氏は、「睡眠薬を飲んでも眠れないと言ったら、ある知人が『教会へ行って懺悔をしたら』とすすめるんだが」と、冗談とも自嘲とも、はたまた本気ともとれるようにおっしゃったので、私はどんな英雄でも終末への不安はぬぐえないのだと推察した。

私はゴリキーの『どん底』で(瀕死の錠前屋の女房に向って)ルカ老人の「死はわしらにとって優しいものだ」という台詞を思い出しながら、一方では「やたらに人に会いたくなったり、物をくれたがるようになったら寿命を自覚したときだから、要注意」という、先輩の忠告を反芻

した。

といって、田口さんの疑問に対して答えなくてはならない。私の返事は、自分でもあきれほど冷静に、そして生意気に、一気に吐き出した。「懺悔なんて神様に直接するもので、代役の聴聞僧なんかは告白することはないんじゃないですか。懺悔しようと思っただけに、もう救われていると思いますよ」……と。

牧師は、幼児洗礼を受けていた氏が、自らの人生をマイナスだったと認識していたが、「神がそれをそのまま受容したとしてプラス化した」と述べたという。私はそうは思わない。氏は最後まで矛盾を抱いたまま旅立ったと思う。そのほうが人間味あふれる田口さんらしいから。

半世紀前の学生山岳団体に 対する新聞論調

山本朋三郎

昭和十七年十一月十七日 火曜日
晴れ 本日の朝日新聞「鉄筆欄」に登山に対する批判記事有り。先日、文部省及び学徒体育山岳振興会に対して朝日新聞朝刊に「学生山岳団体の登山傾向が低山趣味に墮して居る故、すべからず高山峻峰へ挑戦せねばならぬ」との報道に対して本日の

朝日新聞夕刊の「鉄筆欄」に追加批判の記事有り、左の如し。

『学徒練成の元締めたる文部省特に体育振興会の山岳部役員達の時局認識の低調さに一驚した。……親から旅費をせびっては趣味的な自己満足

言う所へ其の方針を向けなければならぬはずである。
従って登山を道楽とする学校山岳部は徹底的に解消し、登山を学校の軍事教練の中に包含せしむる必要がある。

を第三者に誇示する以外、何等意味の無い冒険に走らせる事をもって、学徒練成と心得て居るらしい。今日我が国の山岳会に痛切に要望される事は、登山の為に登山すると言う様な、自由主義的登山理念を一擲して国家的に登山の使命を生かせと言う事である。……国の為に山に登ると

上述の報道は一の真理を誇張して十の真理を抹殺し居る観がある。市井の一山岳団体の時局便乗主義者の投書に基づいた社説で有ろう。時局不認識者に答える。(以下削除)』
当時、立教大学二年生であった私の日記の一文である。一年後の十一月には卒業を待たず三重海軍航空隊に召集され、日本海軍独特の海軍体操で鍛えられている。

言う理念を確立し……直接軍の方針に呼応し銃後に新鋭武力を蓄積すると

操で鍛えられている。

●新ハイキング選書● ●第20巻好評発売中●

一等三角点の山々

山口ゆき子/横山 隆/高柳生雄/川越はじめ/
岡村美邦共著

A5版・310頁・定価1680円(税込)掲載の山 80山
新ハイキング社の一等三角点の山シリーズの三部作「一等三角点の名山100」「一等三角点の名山と秘境」「一等三角点の山々」も発売中
※3冊とも山は重複していません

●日本山岳会選定●話題の本●8刷増刷

日本300名山ガイド

〈東日本編〉〈西日本編〉

市川静子、岡田敏夫、岡部紀正 A5版・320頁
川越はじめ、廣澤和嘉 共著 定価各1680円(税込)
※著者はすべて日本山岳会会員です

新ハイキング社 東京都北区滝野川 7-6-13
☎(03)3915-8110 振替 00130-9-146915

図書紹介



★紹介図書は全て税別価格です

富山県山岳連盟・編

『太刀の嶺高く』

―創立五十周年記念誌―

本年七月に創立五十周年を迎え、創立三十五周年以降の十五年間の特色が記されている。山岳連盟のあゆみ、各山岳会のあゆみ等、海外登山、五十年の思い出と山にかける熱い思いを集め、活動の記録年表、高体連登山部と盛りだくさんの内容である。

富山県山岳界の歴史についても、立山開山にはじまり、近代登山の夜明け当時に活躍した県人、また近年とくに増大した中高年登山者への対応など、創立以来の五十年にわたる長い歴史、岳連加盟の三十団体の様子など、それぞれの思いが伝わる貴重な記念誌である。

(高柳清美)

一九九八年七月 富山県山岳連盟
発行 一七一ページ

江本嘉伸・遠藤正雄・戸高雅史共著

『A LINE 地平線の旅人』

フォトエッセーの文は写真の添えものといったものが多い中、本書の文章は力強く魅力的だ。全体が世代をさかのぼるように巧みに構成されていて、読み進むうちに気分が若々しくなる。逆なら本書の印象はちょっと違ったものになったろう。

遠藤氏の戦場写真はやはり刺激である。氏も登山家であつたらと少し残念に思う。普段ジャーナリストとして他者を語ることが多い江本氏だが、今回は自らを語ってみずみずしい。戸高氏は緊張度の高い文体で、山と一体となること、さらには宇宙との同一化を願うソロの高所登山の実践から新しい登山観を提示する。行動することが哲学になることを私たちは三人から改めて教えられる。新鮮な感性を失うまいとする会員にすすめる。

(絹川祥夫)

一九九八年七月 求龍堂発売 二五五ページ 千八百円

渡辺義一郎・編訳

『中国歴代 西域紀行選』

日本における中国登山を積極的に開拓してきた一人として、著者にはすでに『中国登山ハンドブック』(一

九八一年)があるが、さらに「西域」全般に奥行きを広げようというのが本書の趣旨かと思われる。

西域といえば西欧列強やロシアによる探検記や発見史が私たちの知識の大半を占めるが、本書は、あとがきに触れられているように、日本ではあまり知られていない、中国語で書かれた西域に関する紀行文を翻訳したもので、中国歴代―周、五代十国、元、清、中華民国三千年にわたる各時代から九編が選ばれている。

九編のうちの幾つかは、中国歴代王朝の「正史」の中の地理志に当たる巻の一部である。それを手軽に日本語で読めるのは嬉しいが、簡単な注釈だけでは十分に理解の及ばないものも多い。各文のはじめのところには主として筆者に関する解説が施されているが文献の解題は書かれておらず、出版事情もあるとは思いますが、十分に意味付けができないのは類書がないだけに誠に残念である。

中華民国時代の二編は個人の紀行文であり、出版社から発刊された書籍の抄訳である。この時代の文章も前代に書き残された文献を踏まえて新しい情報を書き加えていくというスタイルは興味深い。

(児玉 茂)

一九九七年八月 ベースボール・マガジン社発行 三二八ページ
二千二百円

ネパール国際山岳博物館募金応募状況

表記の募金にご協力くださった方々のご芳名を掲載し、お礼に替えさせていただきます。(敬称略)

18名 78口 390,000円(11月10日現在) 累計899名 2,505口 12,544,517円

●40口 (200,000円)

同志社大学山岳会・同志社大学
体育会山岳部

●10口 (50,000円)

青木正樹

●4口 (20,000円)

木原玲子

●3口 (15,000円)

畑井喬雄

●2口 (10,000円)

山里寿男 村上勝太郎 寒河江
朋男 廣瀬正 河野直子 山本

栄蔵 千葉庸治

●1口 (5,000円)

仲徳二 有馬純 高橋和弘 下
山壽 山口剛 山口千恵子 山
田信明

図書受入報告(1998年10月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
津波克明	関東の山あるき100選(どこでもアウトドア・シリーズ)	255pp/22cm	昭文社	1998	出版社寄贈
津波克明	みちくさを楽しむ山旅・関東(どこでもアウトドア・シリーズ)	159pp/22cm	昭文社	1998	出版社寄贈
堂本暁子	生物多様性: 生命の豊かさを育むもの(同時代ライブラリー No. 227)	272pp/17cm	岩波書店	1997	著者寄贈
堂本暁子・岩槻邦男(編)	温暖化に追われる生き物たち: 生物多様性からの視点	413pp/20cm	築地書館	1998	編者寄贈
日本山岳会福島支部(編)	やまなみ: 日本山岳会福島支部創立50周年記念誌	147pp/26cm	日本山岳会福島支部	1998	発行者寄贈
瀬川忠四郎	掬霞随想(きくかずいそう)	229pp/20cm	鹿島出版会	1998	著者寄贈
田中弘士	私の山行日記: 定年退職を迎えて	357pp/22cm	田中弘士(私家版)	1998	著者寄贈
渡辺義一郎(編訳)	中国歴代西域紀行選	328pp/19cm	ベースボールマガジン社	1997	訳者寄贈
本の出版社(編)	登山・ハイキングパス時刻表(北日本版・99秋春号)	166pp/26cm	書苑新社	1998	出版社寄贈
船越好文	雪線: 日本アルプス写真集[改訂復刻版]	111pp/29cm	東京新聞出版局	1998	著者寄贈
宇都宮勤労者山の会(編)	栃木県縦走記録集: 創立25周年記念	207pp/26cm	宇都宮勤労者山の会	1998	発行者寄贈
水野勉	ヒマラヤ閑話	211pp/26cm	水野勉(私家版)	1998	著者寄贈
JAC学生部指導委員会	1997年度全国大学山岳部監督会議	105pp/22cm	JAC学生部指導委員会	1998	発行者寄贈
星昭	尾瀬の山小屋絵日記: 淡彩で描く湿原の花と風景	127pp/22cm	日貿出版社	1998	出版社寄贈
遠藤由加	きっと、また登る	151pp/23cm	ソシム	1998	出版社寄贈
日下部雅昭	わたしの百名山: 山と酒と温泉と	315pp/22cm	朝日新聞社	1998	著者寄贈
高野孝子	ホワイトアウトの世界で: 北極海横断・犬ぞりの旅	197pp/19cm	国土社	1998	出版社寄贈
秦野市市史編纂担当(編)	丹沢 山のものがたり	218pp/22cm	秦野市	1998	発行者寄贈
大垣山岳協会(編)	美濃の山(3): 木曽川水系の山	300pp/20cm	ナカニシヤ出版	1998	出版社寄贈
メスナー(著) 松浦雅之(訳)	ラインホルト・メスナー自伝: 自由なる魂を求めて	442pp/20cm	TBSブリタニカ	1992	出版社寄贈
Harish Kapadia	The Indian Siachen Expedition: Rose 1998	30pp/22cm	The Mountaineers	1998	著者寄贈
C. Schicklgruber (ed.)	Bhutan: Mountain Fortress of the Gods	276pp/30cm	Bookwise	1997	吉永英明氏寄贈

会務報告

十月理事会

日時 十月七日 十八時三十分～二十時

十時

場所 日本山岳会会議室

「出席者」 斎藤会長、小倉、大森、竹内各副会長、田邊、伊丹、熊崎、絹川、勝山、村井、飯田、鯉坂、増山、森、宇田川、宮崎、坂本各理事、石橋監事、平山、穴田、長尾、中川、中村各常任評議員

「委任」 吉永理事(ブータン登山隊行動中)、大蔵理事(エベレスト登山行動中)、神崎監事(U I A A 総会マレーシア出向中)、平野常任評議員

【審議事項】

一、事務局職員採用の件 絹川
面接選考で深田由貴子さんの採用とする。十月一日より勤務。承認
二、秩父宮記念山岳賞 竹内副会長
①先月理事会で承認の審査委員に新たに石坂昭二郎会員に委嘱、十名に。
②第一回審査委員会(九月十一日)応募業績ごとに担当委員を決めて審査に当たる。

③第二回(九月十七日)、第三回(九月二十八日)で審査検討し、各委員の投票による候補業績と審査結果を十月十五日運営委員会に報告する。

④運営委員会は候補業績と審査結果を会長に提出し十一月理事会で審議する。承認

三、アメリカ山岳会元会長歓迎会の件 伊丹

京都大学士山岳会でのチョゴリザ初登頂四十周年記念式典に招聘・来日のアメリカ山岳会元会長(一九六七～一九七〇)ニコラス・クリンチ氏が本会を表敬訪問。承認
四、ポカラ国際山岳博物館連絡協議会の件 宇田川

九月二十一日、岸記念体育館で今後の方針・対策について討議された。十一月J A C のネパールトレッキング終了時に合わせてJ M A 八木原氏が訪ネ、カトマンズで合流し現場の状況などを調査して、各団体に報告することも検討された。承認
五、ネパールトレッキング実行委員会の件 絹川

九月二十四日、旅行主催業者との連絡協議の席上、参加多数となった三コースにJ A C よりパーティー・リーダーを増員するよう要請があり、現場実行委員で対応する。承認
六、ガンカー・プンスム偵察隊の件 伊丹

①偵察隊は隊長を含む四名、日本人通訳一名、報道二名(読売)、中国連絡官二名で編成。十月十四日出発、十一月二十二日帰国予定。

②本隊の編成は、総隊長以下十一名、日本単独で、日中合同隊とはしない。承認

【報告事項】

総務委員会・絹川

①全国支部懇談会は九月十九～二十日、秋田支部主管で開催。参加者百六十七名の盛会となり、岡田支部長より礼状が寄せられた。

②新入会員オリエンテーションは十一月七日開催。対象会員は百六十一名、各理事の参加を要請。

③各委員会行事のお知らせ、パンフレットなどは、各種問い合わせに対応できるように、必ず事務局に提出願いたい。

学生部指導委員会・宮崎

①ブータン登山隊は関連各大学などより寄付が寄せられ、前回審議した遠征貸付金制度を利用することなく、十月三日出発した。

②学生マラソン大会、十一月八日、皇居周辺で開催。

③大学山岳部監督会議、十一月十四～十五日、東海支部主管「山びこの丘」で開催。テーマは「雪崩と登攀、その最新理論と最新技術」など。

青年部・宇田川

十月十三日十八時三十分より、代々木オリンピックセンターで、カンチエンジュンガ登山隊の報告・検討会を開催。

海外連絡委員会・熊崎

①十月二十日、市ヶ谷アルカディアでアルバータ峰プロジェクトの打ち合わせに来日のカナダ山岳会会長M・モートイマー氏歓迎夕食会。

②十月三十一日開催のカナダ山岳会年次総会・晩餐会に斎藤会長、熊崎海外連絡委員会理事夫妻が出席。

③九月十八日来日のW・ボナッティ夫妻は日程を終了し十月五日帰国。

自然保護委員会・竹内副会長

①九月二十三日シンポジウム「高山植物―保護と盗掘防止を考える」神田全電通ホールで開催。参加者四百三十名。

②本年度自然保護全国集会、十一月十四～十五日、京都府美山町立自然文化村で開催。テーマは「芦生の森について」「世界遺産登録について」「各支部活動報告」その他。

科学委員会・森

①九月十九日「火山ガス災害シンポジウム」が科学技術庁主催で開かれ、百名を超す参加者があった。当日一九五〇年以降の「ガス事故報告書」一部が本会に寄贈され、図書室備え付けとする。

②十一月二十八日、シンポジウム「科学的にとらえた中高年登山」―中高年者がこれからも登山を続けるために―を明治大学大学院講堂で開催。指導委員会・熊崎

ル ー ム 日 誌

10月
1日 常務理事会 アルパインスキー
クラブ 山の自然学研究会
学生会
2日 フォトビデオクラブ 資料委
員会
3日 会報編集委員会
5日 総務委員会 自然保護委員会
6日 秩父宮記念山岳賞事務局 ア

十月二十三(二十五)日、岩登り技
術研修会を文部省登山研修所で開催
予定。
資料委員会・鯉坂
十月三十一日、全国山岳博物館会
議を開催。
データバンク研究会・鯉坂
ルームロビーのパソコン利用規定
を設けた。各委員会にも主旨の理解
・活用を望む。
集會委員会・勝山
十月十七(十八)日、きのこ山行を
二岐山と小白森山で開催。
山岳研究所運営委員会・坂本
①十月二十五日、今年度の閉所。
②利用状況 九月末で五百四十六名
八月の群発地震と長雨の影響で昨年
度より約一二パーセント減。最終利
用者は六百五十名の見込み。

ルパインスケッチクラブ 山
げらの会 山岳編集委員会
7日 理事会 ジャック93会
8日 青年部 学生会 集會委員会
12日 図書委員会
アルパインスキークラブ 秩
父宮記念山岳賞事務局
13日 二火会 アルパインスケッ
クラブ 95同期会
15日 秩父宮記念山岳賞事務局 科
学委員会 学生会
16日 図書委員会 ネパール国際山
岳博物館打合せ(神崎)
17日 評議員会
19日 総務委員会 自然保護委員会
アルパインスキークラブ 図
書委員会
20日 フィルムビデオ委員会 海外
連絡委員会 アルパインスキ
ークラブ
21日 三水会 山の自然学研究会
山研運営委員会
22日 データバンク研究会 アルパ
インスキークラブ 集會委員
会 学生会
23日 二火会 会計監査
27日 自然保護委員会
28日 総務委員会
29日 青年部 学生会 総務委員会
31日 アルパインスキークラブ
全国山岳博物館等連絡会議
10月来室者651名

INFORMATION



◆パキスタン登山の手引き

日・パ旅行社制作による「パキス
タン登山の手引き」が発行され、図
書室に備えられました。登山申請、
許可書の発給、入国後の必要書類の
作成、事故処理の方法など、パキス
タン国内の登山やトレッキングに必
要な手続きが網羅されています。個
人でゆかれる方はもちろん、旅行業
者を通じてゆかれる方も、基礎知識
取得にご利用ください。非売品。

◆96同期会第二回講演会

日時 一九九九年二月六日(出) 十五
時(二時三十分受付開始)

会場 山岳会ルーム
会費 無料

講師 石井由紀さん
テーマ 「未知の花にあらがれて海
外へ」庭園の花の原種たち」

*同期会以外の方も大歓迎です。ぜ
ひご参加ください。

■会員異動

物故
松元晃(四六六四) 10・9・28
中島寛(五五七〇) 10・10・6
井田博基(二〇九七) 10・10・15
退会
樋口剛(一一六四〇) 10・10・31
終身会員
山口定男(九七六〇)

◆編集後記◆

百二十四名が参加したヒマラヤ・
トレッキングも無事に終わり、六百
十五人が一堂に会した恒例の晩餐会
も、新設の秩父宮記念山岳賞でさら
に充実、今年も幕を閉じようとして
います。
会報に尽力いただいた多くの会員
の皆さまにお礼申し上げます。
二十一世紀の足音も間近に迫っ
ていますが、JAC発展のため、旧に
倍するご協力を期待しています。
皆さまよい年をお迎えください。

日本山岳会会報 山 643号

1998年(平成10年)12月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

FAX 東京 (03)3261-4441

発行者 斎藤惇生

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社